

神奈川大学21世紀COEプログラム  
「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書

Report on the Results of “Systematization of Nonwritten Cultural Materials  
for the Study of Human Societies” Kanagawa University 21<sup>st</sup> Century COE Program

# 日本近世生活絵引

北陸編

Pictopedia of Everyday Life in Early Modern Japan  
compiled from *Nogyo Zue*

# まえがき

日本の近世は「農書の時代」とも称されるように、実に多くの農書が全国各地で刊行されました。この背景にはもちろん識字率が高まり、多くの人が文字を通して知識や情報を得るようになったことがあります。それ以上に農民の創意工夫の努力が情報を求めていたことも大きな理由です。農書はもちろん読む本です。しかし、知識や情報を必要とする人が総て直接農書を読むわけではなかったと思われまゝ。誰かが農書を読み上げて、それを聞くことで内容を理解するという方が却って一般的だったと思います。さらに農書を読むのではなく、見るということも行われたと思われまゝ。多くの農書が挿絵を挿入して、説明を具体化しております。挿絵の比重は次第に高まり、図像中心の農書も編まれるようになりました。

北陸地方でも少なからずの農書が編纂されましたが、その白眉と言うべきものが土屋又三郎の『耕稼春秋』です。この内容豊かな農書に対応するように図像で描いた絵農書があります。神奈川大学日本常民文化研究所には、同じく『耕稼春秋』と名付けられた絵による農書が所蔵されております。そこでこの『耕稼春秋』を対象に絵引編纂を構想しました。この『耕稼春秋』とほぼ同じ内容の書物が『農業図絵』の名称で『日本農書全集』第26巻として刊行されております。それと比較しますと、描き方や描かれた事物を子細に検討しますと、荒さが目立ち、絵引の素材には不向きであることが分かってきました。そこで、『日本農書全集』所収の『農業図絵』を用いて絵引を編纂することにしました。

絵引は、周知のように、濫澤敬三が字引に対する語として創り出した語です。絵を窓口にして、そこに示された事物や行為の名称を示し、また意味を解説する辞書が絵引です。私たち神奈川大学21世紀COEプログラムは、事業の柱として、先輩たちが完成させた『絵巻物による日本常民生活絵引』を継承発展させる事業を設定し、取り組みました。その一つが『日本近世生活絵引』の編纂です。日本の近世に描かれた図像資料に基づき、絵引を編纂するというもので、北海道編、東海道編、そして北陸編が計画されました。本書はその北陸編です。

『農業図絵』は、その書名が示すように、農業を描くことに中心がある書物ですが、金沢城下の生活も描かれ、百姓だけでなく、町人や武士も登場します。それら多彩な人々の暮らしぶりを切り取り、絵引編纂を行いました。今までになかった試みです。編纂にあたっては種々工夫をしましたが、絵引として完成の域には達しておりません。私たちは今回の絵引を試案本と称しているのはそのためです。本書を利用して問題を感じられましたらその問題点を忌憚なくご指摘いただきたく願います。建設的なご意見を頂戴し、よりの確な絵引へ進みたいと思います。

絵引編纂の底本としましたのは『日本農業全集』第26巻所収の『農業図絵』です。利用にあたっては、社団法人農山漁村文化協会、また、『農業図絵』を久しく研究され、農書全集に収録するにあたって校訂された清水隆久氏、『農業図絵』原本の所蔵者である桜井健太郎氏はじめ関係者の皆様のご親切なご配慮を賜りました。ここにあつくお礼申し上げます。

2008年2月

神奈川大学21世紀COEプログラム第1班代表  
福田 アジオ